

大学生の自己教育力に関する研究 (11)

自己教育力とレジリエンスの関係

○清水益治
(大阪樟蔭女子大学)

森 敏昭
(広島大学)

石田 潤
(神戸商科大学)

富永美穂子(非会員)
(広島大学)

Chok C. Hiew(非会員)
(Univ. of New Brunswick)

Students' Self-Education Ability, Resilience

目的 大学生の自己教育力と生きる力(レジリエンス)の関係を、先に作成した尺度を用いて調べる。

方法 調査対象 西日本にある7つの大学の学生計789名(男248名,女541名)を調査対象とした。

調査内容 ①自己教育力尺度:森ら(2000)による尺度のうち、現在用のみを用いた。森ら(2000)は、現在、中学3年生頃、小学6年生頃の3つの時代における大学生の自己教育力を以下の7つの領域について、それぞれ5項目ずつで測定する尺度を作成している。各領域における項目例は、次の通りであり、いずれの項目も「はい、いいえ」の2件法で答えるようになっている。

課題意識:授業が始まった時、「よし、勉強しよう」という気持ちになりますか。主体的思考:人のまねをするよりも、自分で工夫するほうが得意ですか。学習の仕方:本を読む時、大切なところは線を引いたり書き出したりしていますか。自己評価:試験で問題を解いた後で、間違いがないかどうかを点検していますか。計画性:休みの日には一日の予定を立てて行動しますか。自主性:授業中に、自分からすすんで意見を発表するほうですか。自己実現:人々の役に立つ人間になりたいと思いますか。

②レジリエンス尺度:森ら(2001)による4因子からなる尺度。各因子の名前と項目例、及び項目数は以下の通りであり、いずれの項目も“1.まったくあてはまらない”から“5.よくあてはまる”までの5段階で評定するようになっている。

「自分はかなり自信がある」など自分を肯定的にとらえるI AMの因子(8項目)、「私の考えや気持ちをわかってくれる人がいる」など対人的安定性をとらえるI HAVEの因子(7項目)、「一つの課題にねばり強く取り組むことができる」など自分の能力に対する信頼感をとらえるI CANの因子(7項目)、「嫌なことがあっても次の日には何とかなりそうな気がする」など自分の将来に対する見通しをとらえるI WILL(またはI DO)の因子(7項目)。

手続き 自己教育力尺度とレジリエンス尺度、および他の尺度を組み合わせた冊子を作成し、平成12年12月から13年1月にかけて、各大学の教室で実施した。なお分析にはSTATIS

TICAを用いた。

結果と考察 4つの因子のそれぞれに属する項目の得点を合計し、得点の高い方から約5分の1を高群、低い方から約5分の1を低群とした。各群の実際の得点範囲と人数は、I AM因子では高群が40点~28点で162人、低群が9点~19点で173人、同じ順に、I HAVE因子では35点~33点で177人と9点~24点で164人、I CAN因子では35点~29点で149人と7点~20点で155人、I WILL因子では35点~29点で154人と7点~21点で163人であった。

表1は、各因子における高群と低群の自己教育力の平均(標準偏差)とその差及びt-検定の結果を示したものである。4つの因子とも得点高群は低群よりも多くの自己教育力の領域で得点が高く、レジリエンスは自己教育力と関係が深いといえる。

因子ごとにみると、I AMの因子では、自己評価を除いてすべて高群の方が低群よりも有意に自己教育力得点が高かった。自己評価ではむしろ低群の方が自己教育力得点が高かった。自分に自信があっても自己評価が高いとはいえないと考えられる。

I HAVEとI CANの因子では、すべての領域で高群の方が低群よりも自己教育力得点が高かった。これらの因子は自己教育力と関係が深いと考えられる。

I WILLの因子では、自己評価と計画性を除く5つの領域で高群が低群よりも自己教育力得点が高かった。自己評価に関しては差はむしろ負の値であった。自分の将来を見通す力は自己評価や計画性と独立していると思われる。

次に領域ごとに表1をみると、自己評価は、4因子中、2因子で高群と低群の差が有意でなく、むしろ負の値であり、計画性は1因子でその差は有意ではなかった。自己教育力とレジリエンスの関係には、領域による違いがあるといえる。

高群と低群の差の値を因子感で比較すると、課題意識、主体的思考、学習の仕方、自己評価、計画性、自己実現ではI CANの因子、自主性ではI WILLの因子で差が最も大きな値であった。自主性はI WILLの因子と関係が深く、他の領域はI CANの因子と関係が深いことがうかがえる。

表1 各因子における高群と低群の自己教育力の平均(標準偏差)とその差及びt-検定結果

群	課題意識	主体的思考	学習の仕方	自己評価	計画性	自主性	自己実現
I AM	高	2.59(1.47)	3.19(1.34)	3.25(1.13)	2.99(1.27)	2.60(1.49)	4.27(1.04)
	低	2.04(1.37)	2.38(1.47)	3.00(1.22)	3.21(1.16)	2.28(1.46)	3.17(1.36)
	差	0.55 ***	0.82 ***	0.25 *	-0.23	0.33 *	1.16 ***
I HAVE	高	2.58(1.43)	2.91(1.41)	3.33(1.09)	3.15(1.15)	2.76(1.52)	4.28(0.96)
	低	2.01(1.46)	2.54(1.37)	2.74(1.28)	2.89(1.19)	2.24(1.51)	3.04(1.45)
	差	0.57 ***	0.37 *	0.58 ***	0.26 *	0.52 **	0.87 ***
I CAN	高	3.15(1.35)	3.45(1.26)	3.42(1.11)	3.29(1.18)	3.15(1.40)	4.53(0.79)
	低	1.35(1.13)	1.95(1.37)	2.54(1.15)	2.69(1.16)	1.73(1.48)	2.70(1.34)
	差	1.80 ***	1.50 ***	0.88 ***	0.60 ***	1.42 ***	1.83 ***
I WILL	高	2.66(1.44)	3.08(1.42)	3.28(1.04)	3.00(1.26)	2.56(1.49)	4.29(1.02)
	低	2.06(1.37)	2.32(1.46)	2.88(1.22)	3.20(1.09)	2.32(1.43)	3.06(1.41)
	差	0.59 ***	0.76 ***	0.40 **	-0.20	0.24	1.53 ***

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

文献 森ら(2000) 大学生の自己教育力に関する発達の研究-回想的質問紙法による分析- 広島大学教育学部紀要 第一部(学習開発関連領域), 49, 7-14.

(SHIMIZU Masuharu, MORI Toshiaki, ISHIDA Megumu, TOMINAGA Mihoko, HIEW, Chok,C.)